



新たな出会いに向けて“顔”の準備を

「教師の五者論」「五者の精神」という言葉を聞いたことがありますか。五者とは学者・役者・易者・芸者・医者を指し、教師はそれぞれの顔をもつものとされています。

「学者」とは、指導する内容を超えた膨大かつ新しい知識や技術を習得すること

「役者」とは、子どもの心を惹きつけ、魅了すること

「芸者」とは、学びの場が、子どもの楽しみになるようにすること

「易者」とは、子どもの将来を見据え、不安を除き、自信と勇気をもたせること

(例えば、「大丈夫、先生がついてるよ」「あなたならできる」「きつとうまくいく」などの言葉かけを通して)

「医者」とは、子どもの心身の発達や性格・タイプ、つまずきの背景を理解すること

「芸者」以外の四者については、「教師は四者悟入」とも言われます。四捨五入になぞらえた表現なのでしょうが、「悟入」は“悟りの境地に入る”の意です。昨今の教師には、四者・五者以上に多くの役割が求められているとも言えますが、肝心なところは言い当てているように思います（いずれも出典は特定できていないようです）。



これらに序列はありませんが、出会いから早い段階で子どもたちがホッと安心し、信頼関係の基盤が築かれるためには、「役者」の側面が発揮され、子どもが教師に惚れ込んで、「僕の、私のお気に入りの先生」になれるかどうかを鍵を握ります。

「役者たる教師」として子どもの前に立つことは、観客を前にステージに立つことと同じです。スポットライトやテレビカメラこそありませんが、良いパフォーマンスがなされるためには、親しみが感じられ、ステージ映えする「顔」が大事です。

「教師－子ども」の関係が、「役者－観客」の関係と決定的に異なるのは、**子どもは教師の表情・顔色をよく見ていて、情緒や行動がその影響をダイレクトに受ける点**です。もし、子どもが、「先生は大体いつも機嫌が悪くて怖い顔してる」「先生は急に怒りだすから怖い」と感じるなど、イライラ感満載の表情が多かったり、気分の変動、感情の波が大きかったりすると、子どもは落ち着かず、教師に忖度ばかりするようになります。それを「素直な良い子」と誤って受け止めてしまうと、子どもに蓄積するストレスを見落としてしまいますし、一方で、状況察知が苦手な子が、感じるままに遠慮なく、実は素直に反応するのを「ひねくれた子」「かわいくない子」と感じてしまうと、不適切に疎んじてしまうことになります。

もちろん、笑顔や穏やかな顔だけで指導はできません。場面ごとに**多様な表情を瞬時に使い分ける**ことが必要で、それが「教師は役者であるべし」と言われる所以です。特に、本気スイッチが入ったときの**真顔**が**つくれることは、教師にとって必須のスキル**です。真顔というのは怖い顔のことではなく、本気の迫力を感じさせるものです。

教師の顔は子どもの顔に反映されます。子どもたちが穏やかな表情で笑顔が多く見られるよう、そして、メリハリある適切な行動がとれるよう、子どもの前に立つその前の数秒間、「今日の私の顔チェック」はいかがでしょう。役者と違って、ダメ出ししてくれる演出家がいま
せんので、自己点検が大事ですね。

※ マスク越しの顔づくりもお忘れなく！



学校生活適応支援アドバイザー（飯山・大瀧）
TEL 639-4392